ポインセチアと、影の伸びる部屋

赤峰智子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポインセチアと、影の伸びる部屋

【Ｎコード】
Ｎ７９３６Ｃ

【作者名】
赤峰智子

【あらすじ】
新聞配達員の男に興味を持ってしまった主婦が、想像だけで不倫をしてしまう話。

プロローグ／七月二十三日（前書き）

中盤から後半に掛けて、かなりの狂気じみた展開になる予定です。グロテスクな表現やホラーが苦手な方は、【主人公が夢を見るまでの間】のみをお楽しみ下さい。決してほのぼの系やエロ☆ドキ（エロエロドキドキ）を期待なさらない様、お願い申し上げます。

プロローグ／七月二十三日

スクーターのエンジン音の度に、私は席を立って窓へと駆け寄る。彼が来る時間は大抵決まっているのにも関わらず、どうしても期待してしまうのだ。
しかしその音の主は全て違う人の物であり、私はその度にガッカリし、そして自分の甘い考えを恥じる。

時刻は十四時。下校する小学生も未だ居らず、しんと静まった部屋には何となく点けていたテレビだけが一人ケタケタと音を発している。
「もうこんな時間かぁ…」そう呟いてから、私はハッとして慌てて朝食の後片付けを始めた。
私と夫、二人分の茶碗が泡にまみれながらカタカタとぶつかり合う。私は今、夫と二人で生活している。三ヶ月前に結婚したばかりの、いわゆる新婚夫婦だ。

そして私が期待していたスクーターの主は、早く帰って来た夫……
…ではない。

…この辺りを担当しているのであろう、新聞配達の若い男なのだ。

その男と出会ったのは、勿論夫と結婚した後である。
ほんの数週間前、たまたま買い物の帰りに、その男が郵便受けへ新聞を入れる所に出くわしたのだ。

と言っても、すぐに声を掛けて親密になったりだの、それから何故か投函と帰宅のタイミングが合って、お互い意識し合ったりだの、そんな事は何も無い。

「ご苦労様。」『……いえ。』

こんな会話を交わしたきり、それ以来一度も会ってもいないし言葉を交わしたりもしていない。
お互い、特に何も思っていない筈だ。

だがどうしてか、暫く経った今になって、妙に思い出してしまうのだ。
特に印象に残る顔ではない。地味で、びっくりする程の不細工でも美男子でも無い。

細身だが、伸びきったTシャツに、ヴィンテージとは違う履き古したジーンズとスニーカーを選択するセンス。
髪も肩にまで掛かる程では無いにしろボサボサの長目の髪で、しかも今のご時世で染めてもいない。

そんな有りがちな貧乏大学生といった風貌だった。

確かに私の好みに重なる点もあるが、熱を上げる程ではないのは私が一番解っている。

だけど、どうしようも無く気になってしまうのだ。もう一度会いたくなってしまうのだ。

洗い物を終えた私は再びソファーに寝そべり、ガヤガヤとやかましいワイドショーを虚ろに眺めた。

第二話／七月三十日（前書き）

ＢＧＭは椿屋四重奏【導火線】がお勧めです。

第二話／七月三十日

その男が気になり始めてから、私はずっとスクーターの音だけを待ち侘びて過ごしている。
誤解して戴きたくないのだが、私は別に夫に興味を失った訳ではない。夫の事は勿論好きだ。家族計画の事もちゃんと考えている。

ただ、その男への感情は、夫へのそれとは少し違う気がしている。
強いて言うなれば俳優やアイドルに熱を上げる、ああいう物の様な。
……それが果たして良いのか悪いのかは別にして。

……

今日はいつもより多くその男を見る事が出来た。どうやら道に迷ってしまったらしい。

マンションの四階なので声は聞こえないのだが、路肩にスクーターを停め、汗を拭いながら管理人の婦人に何かを尋ねる表情は、焦っているようで可愛らしい。

「……今時の無気力な子だと思ってたけど、意外と熱心な所があるんだ……。」

私はまた呟く。何だか自分の息子を見ている様な感覚だ。

『息子って、一体私は幾つなのよ。まだ二十六のクセして』一人突っ込みを入れながらクスクスと苦笑する。

そうしている内に男は笑顔で礼を言い、走り去ってしまった。笑顔も素朴で可愛い。

『将来、息子が出来たとしたら、あんな子が良いなぁ』私はそう思いながら夕飯の買い物に出掛けた。

今日の晩御飯はハンバーグにしようと思う。夫の好物なのだ。

私はあまり料理上手では無いのだが、ハンバーグだけは上手く作れる自信がある。

きっとあの大学生の様な笑顔で『美味しい』と言ってくれるだろう。

私は軽く鼻歌を歌いながら部屋の鍵を閉めた。

第二話／七月三十日（後書き）

展開が遅くてタルいかもしれませんが徐々に進行させる手段なので、期待せずゆっくりお付き合い戴ければ幸いです。

第三話／八月二十七日

八月に入ってからは、夫の親類との旅行や帰省、お盆の墓参り等で色々と忙しくしていたせいで、その内段々と新聞配達の男の事を忘れていった。

『先月のは、多分ちょっとした気の迷いだったんだろうなぁ』
私は一人納得して、夏の暑さにやられながらも何とか生活を続けていた。

……

今日は地元の友達が夏フェスの帰りにこの近所まで寄ってくれるというので、私は早起きして支度をしていた。
夫にも今日の事はちゃんと知らせてあるし友達の事も知っているので、まさか不倫だ浮気だと勘違いしたりしないだろう。
夫は朝の見送りと夕食の準備が間に合ってさえいれば、他の事に対

してはかなり寛容の様だ。

いつもの様に夫を見送って、急いで後片付けと洗濯を済ます。
今日は久しぶりにきちんと化粧をして、お気に入りのミュールを履こう。
そう考えると、まるで独身の頃に戻った様でとてもワクワクしてきた。

私はキャミソールに、薄手のふわっとした、裾にレースが付いたキャミワンピースを重ねた。そして例のお気に入りの華奢なミュールを履く。
化粧も下地からしっかりして、更に髪もコテで巻いた。
さながらどこかのお嬢様の様な格好だ。多分人妻に見える事は無いだろう。
私は玄関の姿見の前に立ち、一言『よしっ』と言って、家を出た。

外に出ると一転、真夏の直射日光はとても厳しい。
私は日傘を深目にさした。
すぐ横をスクーターが通り過ぎたが、私は目も遣らず歩き始めた。

友達に予定が入ってしまい新幹線を三本繰り上げて帰らなければならなくなったので、予定より大分早く切り上げて私は帰宅した。
凄く残念だったが、それでもとても楽しく充実した時間を過ごす事が出来た。

友達と合流した後はイタリアンレストランに入り、昼間だけど二人でワインを呑みながらランチ。その後は百貨店で夕飯のおかずをワイワイ一緒に選びながら買った。
まだ少しワインが残っている様で何だかとてもうきうきする。
時計を見るとまだ四時を少し回った所なので、夫が帰るまでにはきっと抜けているだろう。

マンションへ入ろうとすると、何だか見覚えのあるスクーターが停まっている。
『……誰のだっけな』
そう思いながら自動ドアの前に立った。
すると、同じタイミングで中から人が出て来た。

例の新聞配達の男だった。

『あっ……！』
先月私を襲った感情が、再び首をもたげる。

「ねぇ……ちょっと！」
今から考えると何て大胆な事をしたのだろうと顔が熱くなるのだが、昼間の酔いが手伝ったのか、私はその男を大声で呼び止めた。

『は？…俺っすか？』
若い男は大儀そうに振り向く。間違いなくいつも眺めていた男だ。

「そう、貴方。えーっと……この辺りの新聞を配ってるみたいだけど、貴方、大学生？」
何も言いたい事なんか無かったのだが、声を掛けてしまったのだから話を続けなければならない。私は適当な事を聞いた。

『はぁ、まぁ、そうっす。』
男は怪訝そうに答える。

「この暑い中ご苦労様。…あっそうだ、貴方、今時間有る？暑いでしょ、お茶でもいかが？」
いったい何て事を言っているんだ、私は。
だけど、考えるより早く言葉が口を突いて出てしまう。

『時間はありますけど……そんな、悪いですし良いです。』

当たり前だ、不審な行動にも程が有る。よもや下心が有るとすら思われているのではないか？

「そう…。ごめんなさいね、こないだたまたまお見掛けして、それ以来ずっと大変だなって思ってたの。あの、どうか変に思わないでね。気を悪くなさらないで。」

私は慌ててまくし立てる。更に変に思われたかもしれない。

私は気まずくなって、俯いてしまった。

するとスクーターのエンジンを切る音が聞こえ、それに続いて思いがけない台詞が聞こえた。

『…や、良いっすよ全然。むしろ、気遣って貰えて嬉しかったっす。』

若い男は照れ臭そうに、ははは、と笑う。

……この笑顔。

何故か真剣にその笑顔を見つめてしまった。

「……そう？それなら良かった。」

我に帰り私もつられて微笑む。

「アルバイト、大変ね。今何年生？」

気を良くした私はそのまま尋ねた。

『一応三年っす。……まぁ、一回ダブってんので今二十ニなんすけど。』
男はばつが悪そうに笑いながら答える。

「あら、一年多く勉強なんて大変ね。」
調子に乗ってからかってみた。

『そう、ほんと大変っすよ。親にめちゃめちゃ怒られるわ、仕送り減らされるわで。だからこうやって新聞配達のバイトも始めたんす。』
男は流れる汗を拭きながら答える。
この季節、日が完全に暮れるまでは充分暑い。

「あはははは、それは自業自得って言うんでしょ？」
私は笑いながら時計を見た。今は四時半、そろそろ配達に戻らないといけない時間だろう。
「ごめんなさい、すっかり話込んでしまって。もう四時半だけど、時間大丈夫？」

『あっ、それはちょっとヤバいっすね。じゃあそろそろ配達戻ります。それじゃあ。』
男はスクーターのエンジンを入れた。

「それじゃあ配達頑張ってね、ダブりの大学生さん。」

私が言うと、男は苦笑しながらスクーターに跨がった。

私が手を振ると、ダブりの大学生は『有難うございました』と言いながら軽く会釈して、そのまま走り去った。

スクーターが角を曲がるまで見送った私は、何とも言えない温かな気持ちで新聞を取ると、鼻歌を歌いながらエレベーターへ向かった。

その晩、えらく上機嫌な私を見て夫が『えらく楽しかったんだな！』と笑いながら言った。

「凄く楽しかった。あの子も全然変わってなかったし、昼間っからワインがぶがぶ呑んで。」
私は刺身を皿に盛りながら答える。
「後ね、今日は新聞配達の大学生と話しちゃった。」

夫が新聞から顔を離し、私を見る。
『…新聞配達の大学生？』
怪訝そうに尋ねた。

「先月かな、何度か見掛けてたんだけど、今日たまたまマンションの入口で出くわしてね。……あ、ご飯出来たよ。」
私は夫を呼んだ。

夫は『おう』と返事をして、新聞を畳んで食卓へついた。
《いただきます》
と二人で声を揃えて言う。

「ごめんね、今日は出掛けたから買ったお惣菜ばっかになっちゃった。」
と私が言うと、夫は
『良いよ、別に。…ところで、その大学生とはどうなったんだ？』
と聞いた。

「あ、そうそう。それでね、今日暑かったじゃない？その子凄くし

んどそうだったから声掛けたのよ。近頃の子ってもっと無愛想だと思ってたんだけど、意外とちゃんと話の出来る良い子だった。」
私は刺身に手を伸ばしながら言う。

『……もしかして、惚れたんじゃない？その大学生にさ。』
夫はニヤニヤしながら言ってきた。

「あはははは、違うよ大丈夫。私の好きな人は貴方だけですから！」
私が茶化してそう言うと、夫は
『相変わらず、口が上手いよなぁ。』
と笑いながら返した。

その夜布団に入りながら、私は今日の事を思い返してみた。いきなり
「お茶でもどう？」
なんて、やっぱり不審だったなと猛反省する。
だけど、まさかスクーターのエンジンを切ってまで答えてくれるなんて思ってもみなかった。

ふと、夫が言った『惚れたんじゃないの？』という言葉が頭をよぎる。

私は何故かドキドキしてしまって『無い無い、そんなまさか！』と
一人自問自答しながら勢い良く布団を被った。

私はドキドキを静めようと目を閉じる。
もやもやした暗闇の中に浮かんできたのは、眩しい太陽の下で照れ
臭そうに笑う、一人の若い男の顔だった。

第四話／九月十三日

最近、どうもおかしくなってきた。
八月の末にあの子と話をしてから、妙に気持ちがそわそわして落ち着かないのだ。
それは家事や買い物等、別の事に集中していたら忘れてしまう程の物なのだが、ワイドーショーを眺めている暇な昼間や夜寝る前になると、急に思い出して体が熱くなる。
特に一番酷くなるのが丁度先月その子と話した時刻、つまり午後四時半頃。
その辺りの時間になると、買い物に向かう主婦や早帰りの人のバイクのエンジン音が多く聞こえてくる。

そのせいも有るのだろう、エンジン音が聞こえる度に私はまた外を確認する様になり、最近ではもう一々移動するのが邪魔くさくなってしまって食卓の椅子を窓辺へ移動して、そこで時間を過ごす様になってしまった。
少し前に韓国人のアイドルや俳優に熱をあげる年配の主婦が話題になっていたが、もしかしたら私も対象が変わっただけで、その時の主婦と同じなのかもしれない。

……

今日は夫の誕生日なので、下手なりにだが御馳走を作ろうと思い、少し遠出の買い出しに出掛けた。
「たまにはビーフシチューなんか煮込んでみようかな。一緒にフランスパンを焼き直して……後はレタスとプチトマトと玉葱辺りを買ってローストビーフとマリネにでもすれば、この気温でも熱いものになりすぎないかな。」
一人ぶつぶつ言いながら車を走らせる。うちは珍しく夫用のワゴン車と私用の軽自動車が有るのだ。
私の今の頭の中は、今日の献立と食後のおいしいケーキを買う事、後はプレゼントの事しか無かった。あの男の事なんか欠片も思い出さない。

私は百貨店の駐車場に車を停め、ぶらぶらと買い物を始めた。
　煮込む用の紙パックのワインと飲む用の少し値の張るワイン、各種野菜に牛肉、そしてまだ温かいフランスパンと朝食用の果物を買う。
食後のケーキは家の近所にあるお気に入りの所で買うので、一旦そこで買い物を止めて車に戻った。

車に乗り込み、手元のメモと買った袋を照らし合わせながら買い忘れが無いか確認する。
「よしっ、ちゃんと全部買ってある！」
私は笑顔で呟いた。記念日というのは当人だけじゃなく周りの人まで嬉しくさせる気がする。

自宅に着いた私は、早速シチューの煮込みに取りかかった。
今は午後四時を少し回った所、夫が帰るまで後三時間半近く。一晩は煮込んでいないが、圧力鍋を使っているのでそれだけ有れば充分良い味になっている筈だ。
鍋の火を弱火に落とし、ワインを冷蔵庫に寝かせてから私はケーキを買いに出掛けた。火が少し心配だったけれど、ほんの二十分くらいなので多分大丈夫だろう。

なるべく早歩きでケーキ屋さんへ向かう。火の事も勿論有るけれど、何よりケーキが売り切れてしまわないかが心配だったのだ。そこそこ人気の有るケーキ屋なので、夕方になるとシフォンケーキの類以外売り切れてしまう事もざらなのである。

ケーキ屋さんに入るとまだ大分ケーキが残っていた。季節柄、生ものなのであまり売れないのかもしれない。
私は夫とシェアして食べる用に三つケーキを買った。
イチジクと桃のタルト、バラと木苺のブランマンジェ、そして明日に残っても良いようにブランデーケーキを。

五時前と言えども、まだ直射日光は厳しい。ケーキ屋を出た私は、日傘をさして早足で帰宅した。

何となくマンションの入り口で時計を確認する。
…その途端、先月の会話がいきなりフラッシュバックした。
「もう四時半だけど、時間大丈夫？」
『あっ、それはちょっとヤバいっすね。じゃあそろそろ配達戻ります。それじゃあ。』
…男の照れた様なあの笑顔。
話し掛けた当初の表情と、饒舌になった時の表情のギャップ。

……私は思わず暫く立ち尽くしてしまった。
ハッと我に返り、慌てて時計を確認する。五時七分。
「いっけない、コンロ点けっ放し！」
私は小走りでマンションの自動ドアを抜けて、部屋へと向かった。

火は大丈夫だった。だがもう少し気が付くのが遅かったら、折角のシチューが焦げてしまっていたかもしれない。
『最悪…誕生日だってのに、何考えてんだろ、私』
激しい自己嫌悪が私を襲った。

午後七時を少し回った辺りで夫が帰宅した。予想より、少し早い。
「お帰り。今日は早かったんだね。」
と言うと、
『今日は俺の誕生日だからな。きっと何か用意してくれると思って。』
夫は、へへへ、と笑いながらネクタイを外す。
「あはははは、ちゃっかりしてる。…今日はね、珍しくシチューなんか炊いてみました！」
『この匂いはそうだろうな、と思ってたよ。』
こんな会話をしながら、夫は食卓についた。
『おっ、珍しく花なんか飾ってるじゃん。主婦だねぇ。』
夫はコップに活けた花を触りながら言う。
「それはね、グラジオラスっていうの。花言葉があって、“情熱的な愛”って意味なんだって。」
私はシチューを器に盛りながら、得意気に言った。花言葉は昔小さい頃、好きで良く本を読んでいたのだ。
『へぇ…嬉しいねぇ、いつまでこんな豪勢な誕生日を祝ってくれるかな』
夫はこちらを見上げながら可愛らしく言う。
「出来る限り、頑張ります。」
私は器を夫の前に置きながら笑顔で答えた。

《いただきます》
私達はささやかな晩餐会を始めた。

今日は夫と二人一緒の布団で寝た。
どうやら仕事で疲れていたらしく、横になるや否や夫は深い寝息を立て始める。
私はそれを『いつまで経っても可愛い奴だなぁ』とニヤニヤしながら横目で見た。

夫に寄り添う様に寝転び、目を閉じる。
ふと、脳裏に私があの新聞配達の男と一緒に夕飯を食べている風景

が浮かんだ。
途端に胸の鼓動が早くなり、顔が、かぁっと熱くなる。
『夫の誕生日ですらこんな事がまず最初に浮かんでしまうのか』と、再び激しい嫌悪感が襲った。

だがそれは思い描いた私に対してであり、何故か浮かんだ風景については何も思わない。

耳を澄ますと、夫の静かな寝息が聞こえる。
私はわざと夫に抱きつく様な体勢を取って、さっきの風景を消し去ろうと努めた。

胸の鼓動は、未だ静まる気配を見せなかった。

第五話／十月八日

あれから、もう二週間近く経った。街並はすっかり秋の気配を見せていて、五時に近くなると日も暮れてくる。
近頃私は秋になったのをきっかけに、夕方に散歩をするようになった。
……彼を見る為に。

今日はいつもの時間より遅れている様だ。
これ幸いと、私は待ち伏せしてその子と偶然を装って話をしようと決めた。

私はマンションの郵便受けの前でその子を待つ事にした。
【偶然見掛けて声をかける方法】は今までに何度か使ったので、少しパターンを変えないともしかしたら怪しまれてしまうかもしれないと思ったからだ。

私が暫くぼうっと郵便受けの前で待っていると、その子がやってきた。
「あら、また。奇遇ね。」
私は笑って言った。勿論、奇遇な要素なんて全く無い。
『あ、こないだの。』

その子は、私を覚えていてくれた。
「今日はいつもよりちょっと遅いみたいね、混んでたの？」
と、『どうぞ』と手渡された新聞を手に、何気なくを装って話し掛ける。
『いえ、今日は配達の順番変えてみたんす。…もしかして新聞届くの待ってたんっすか？』
その子は眉間に少し皺を寄せ、申し訳なさそうに聞いた。何だか胸がきゅん、とする顔だ。
「いいえ、大丈夫よ。私はただ散歩して……あら、こんばんは、奥さん。」
隣の部屋の奥さんがドアを抜けて入ってきた。
しまった…何か怪しまれたらどうしよう。微笑みながら挨拶をする私の背中に、一筋の汗が流れる。
『こんばんは、奥さん。最近急に寒くなりましたねぇ。お体大丈夫？』
相手も笑いながら尋ねた。…どうやら怪しまれていない様だ。
「えぇ、何とか。旦那がちょっと体調崩してるみたいで、それが心配なんですけど…。奥様の所もお気を付けて下さいね。」
私は表情を変えずに言った。
『心配有難う、ウチのにも言っとくわね。……あら、新聞配達？若いのに感心ねぇ、頑張って頂戴ね。』
奥さんは一声かけると、それじゃあ、と会釈してキーロックを開けて入っていった。
『あっ、どうも…。』
まさか声を掛けられるとは思っていなかった様で、少し緊張しながら新聞配達の大学生は答えた。

『奥さんって…もしかして結婚してんっすか！？』
その子は私が既婚者だと知ると凄く驚いた。

どうやら私の事を同い年か一、二歳上のお嬢様育ちの人だと思っていたらしい。マンションの雰囲気に加え、前会った時の話し方や服装のせいだろう。
私は
「ふふふ、そんな育ちは良くないわよ。言葉遣いに気を付けてるだけ。こないだは突然だったし、それに凄く親しい人と話してるんじゃ無いでしょ？夫と話す時はもっと普通に喋るのよ？」
と笑って答えた。
『へぇー、そうなんすか。全然想像出来ないっすよ！』
とその子も笑いながら驚いて言った。
「初めて言われたわ、お嬢様なんて。有難う。」
私は少し上目遣いで言う。
『いやいやそんな…。こっちこそ、勘違いしててすんません。……っと、そろそろ戻らないと！もうこんな暗くなってる！』
その子は外に目を遣ると、挨拶もそこそこに慌てて出ていってしまった。
私は急いで外へ出て、小さくなっていく背中に手を振る。バックミラーにでも映らないかと思ってだ。
姿が見えなくなってから、誰も見ていないのに私は一人ぷぅっと頬を膨らませる。
しょうがないの事なのだけど、何だかとてもつまらない。もう少し話をして居たかった…。…そこまで考えて私は小さく息を飲む。
そして自分の両手をまじまじと眺めた。
『まさか……そんな…』
血の気がサァッと音を立てて引いていく。頭が何だか冷たい。
私は新聞を握り締めて小走りで部屋に戻ると、ソファーになだれ込

み、顔をのけ反る形で背もたれに身体を預けて大きな溜息をついた。
そして前から感じていた感情の正体に頭を抱える。

『私……あの人の事が好きなんだ……』

どうやら私は彼に恋をしてしまったらしい。

……

ここまでが、前月の末の話である。

あぁ、一体私はなんて不埒な女なんだろう！とても夫や世間に顔向け出来ない。

しかも恥ずかしいのはこれだけではないのだ。

…実は恋心を認識してからと言うもの、毎晩毎晩、私はその子との密会…つまりは不倫する様子を床についてから一人想像していたのだ。何故なら、実際に逢う訳には勿論いかないからである。

恥ずかしい話だが、私の頭の中では私達は既に何度もこっそり逢っている。

誤解して戴きたく無いのだが、勿論、最初はそんなつもりじゃ無かった。《ただ、もしこれから仲良くなったら…》と二人でいつもの様に立ち話をしている所を考えていたのだ。
だけど……その内、それだけじゃこの気持ちが治まり切れなくなってしまったのだ。
立ち話から、《もし家に上がって貰えたら》にスライドし、そこから……遂にはこのレベルにまで来てしまったのである。

想像の中での二人で逢う日というのは、彼の学業に支障が出ない様、勿論ゼミが休講の時に。
ちなみに想像している内容は、お昼を一緒に食べて告白するというものだ。

……

私は決心して、遂に彼を自宅に招く。
夫の居ない昼間に招かないとならないので、『お昼でもいかが？』という名目をつける。

マンションの前で待ち合わせる。彼はいつもと同じ質素な格好だ。
彼は家に入ると、肩身狭そうにソファーへちょこんと座る。
私はまだ自信のある煮物を振る舞う。
「どうぞ。」と呼ぶと、『すいません、わざわざ…』とはにかみながら席に着く。

煮物を口に運ぶなり彼は
『自分でこんなの全然作んないんで、すげぇ美味いし嬉しいっす！』
と笑顔で言って、それから貪る様にがつがつ食べる。
私は
「こんな適当なので、そんなに喜んでくれると有難いわ。」
と彼と向かい合わせに座り、両の掌を合わせて照れ臭そうに喜ぶ。
『こんな料理が毎日食えるなんて、旦那さんは幸せもんっすね！』
彼は味噌汁を飲みながら言う。
「そう？私あんまり料理が得意じゃないから、あの人も実は不満なんじゃないかしら。」
と苦笑しながら私は答える。
「ご飯、少しおかわりする？」
と私が聞くと、彼は
『すいません、お願いします！』
とにこにこ笑って私に茶碗を差し出す。
「こんな料理食べないって、貴方彼女とか居ないの？それとも彼女もお料理苦手？……あ、ご飯、こんなもんで良いかしら？」
私はご飯を少し盛った茶碗を渡しながら聞く。
『あ、丁度っすね。有難うございます。……彼女っすか？居ないっすよ、そんなの。』
彼はご飯を掻っ込む。
「どうして？別にモテない様な顔じゃないじゃない！」
私は驚いて言う。
『んな事無いっすよ、マジで。前の彼女と別れてから、もうかれこれ1年近く経つかな。もっとマシな顔だったら不自由しないだろうけど、所詮はこのツラっすからねぇ。』
彼は、ははは、と苦笑する。
「そんな事無いわよ！！現に私…っ！」

私は、つい声を張り上げてしまう。
『……奥…さん…？』
彼は顔を上げて、目を見開き信じられないといった様子で私を見る。
「……いい歳の女が…下心無しにいきなり話し掛けたりご飯に誘ったり……すると、思う？」
私は恥ずかしくて顔を上げる事が出来ずに、組み合わせた両手をただ見つめる。
『……そう…だったんすか。』
彼は箸を置いてこう言う。

そしておもむろに、自分の手で私の両手を包む様に重ねる。
「えっ……！？」
私は思わず声を上げ、彼の顔を見る。
彼は今までに見た事の無い、何とも言えない真面目な表情をしている。
『俺も……好意無しにこんなのこのこ、お邪魔すると思いますか？』
彼は口元に軽く笑みをたたえながら言う。
「えっ……それじゃあ……」私は尋ねる。

信じられない、まさかこんな返事をされるとは。胸がドキドキして、顔を中心に身体全体まで、かぁっと熱くなるのが解る。

『……俺もです。』
彼は言い、私の手を強く握る。
彼の手は緊張のせいか軽く汗ばんでいる。何だかとても必死で可愛らしく感じる。

「貴方……」
涙で視界がぼやけてくる。
「…有難う、嬉しい……」
彼に手を強く握られたまま、私はぽろぽろと涙を零す。
彼はとても優しく笑い、私の手をもう一度握り直す。
私は、確かに彼に恋をした。

……

こんな事を毎晩、何度も何度も繰り返し考えて楽しんでいる。
気持ち悪いと思われるかもしれないが、でもどうしてかやってしまうのだ。どうしても、止められないのだ。

……多分、また今夜もやってしまうだろう。だが…。

『……まだ夜に人知れず考えてるだけだから、大丈夫だよね』
私はそう自分に言い訳しながら洗濯物を広げる。

いやに湿った洋服の冷たさを感じる。
私はそれすら気のせいと思い込んで、そのまま家事を続けた。

テレビのニュースでは、昨夜起こったストーカー事件を報道している。
私はテレビのスイッチを消して家事に集中した。

第五話／十月八日（後書き）

書きながら、自分でもどっちがどっちか解らなくなってしまいました（苦笑　これから益々酷くなるので、これで駄目な方はこれ以上お読みにならない方が良いかと思います。

第六話／十月二十八日

『それじゃあ行ってくる。』
靴箱の鏡で服装を整えると、夫は言った。
「行ってらっしゃい。今日もいつも通り？」
私はハンカチを渡しながら言う。
『うーん、今日はちょっと遅れるかも。あれだったら先に食べてて良いよ。』
夫は眉をひそめ少し考えてからそう答えると、サンキュ、と言ってそれを受け取り鞄に入れた。
「うん、解った。…行ってらっしゃい。」
笑顔で手を振ると、夫は照れた様に少しはにかんで外へ出た。

バタン、とドアが閉まる。
私は振っていた手を下ろし、パタパタとスリッパを鳴らしながらリビングへと戻った。
ソファーに座ると急いでテレビのチャンネルを変え、朝の星占いをぼうっと眺める。
夫はたいていいつも同じ時間に出勤するので、見送った後にチャンネルを変えるとちょうど星占いになるのだ。特に占いを信じている訳では無いのだが、何となく気になって見てしまう。

占いの存在理由なんて、どうせそんなもんだろう。

「……射手座は五位、かぁ…。……微っ妙ー。」
私は一人くすくす笑う。中の上。満足するにはには低く、悔しがるには高い、そんな順位。
「何なに？ラッキーアイテムはベイエリア…？…うーん残念、今日は一日家に居る日なんだよなぁ。山ならまだ近くにあるのに。」
誰に言う訳でもなく、一人テレビに応答する。
住んでいるマンションはいわゆる住宅街という所に有るのだが、夫の要望でその中でも山に一番近いマンションを借りたのだ。車で五分も掛からない内に麓へは着く。
休日に何度か二人で登山をしたり、ロープウェイで登って山頂の小さなレストランでディナーをしたり、その山にはちょっとだけ思い入れが有るのだ。

「……ベイエリア、か……。」
私は海に面したアウトレットモールを想像する。
６０年代や７０年代のアメリカ風にデザインされた、煉瓦や木で作られた店がズラッと並び、色とりどりにディスプレイされたお洒落な服屋や雑貨屋についつい目を奪われる。
天気は秋晴れ。海面はきらきらとダイアモンドダストの様に輝き、独特の湿っぽさと匂いを含んだ海風が髪をばさばさと弄ぶ。

私はそこで人を待っている。
誰を？

……あの彼だ。

私はいつもの様に想像を始めた。ここ最近、回数が朝、夕方、夜の三回に増えている。
前までは夜だけで事足りていたのだが、最近ではそれで物足りなさを感じてしまう様になってしまったのだ。
先週までは夕方と夜の二回。しかし今週になってからは、ついつい朝も耽ってしまい三回になってしまった。
内容は前と異なり様々。家事を終え休んでいる時にふと目に映った事が鍵刺激となって、彼との逢瀬を引き起こす。
今回はベイエリアでの逢瀬だ。

……

相変わらず、海風が髪を弄ぶ。十月も末になると、海辺なのも手伝ってもうすっかり寒い。

「気合い入れてスカートなんか履いてくんじゃなかったなぁ…。」
顔に掛かる髪を直しながらボソッと呟く。
ロングブーツを履いているが、風のせいで足元がとても寒い。待ち合わせ時間の五分前に着く様に出て来てしまった自分の性格を少し恨む。
時間はちょうど待ち合わせ時間になる。
辺りを見渡すが、まだ彼らしい人は居ない。
……彼はたまに遅刻してくるので、もしかしたら今日も遅刻するのだろうか。私はちょっと苛々する。

《ぽんっ》
いきなり肩を叩かれて、私は飛び上がる。
慌てて振り向くと、彼がにこにこ笑いながら立っている。いつもと同じ、相変わらずくたびれて色の落ちたジーンズに汚れたハイカットのスニーカー、上着はロングTシャツに茶色いジャージを着ている。
何だか流行を取り入れているのか、着回しているのか解らない格好である。

『すんません、驚かせちゃいました?』
彼はへらへらと笑って言う。
…何だかその表情を見るだけで、こちらも知らない内に笑顔になってしまう。

これが恋なんだろう。

「いいえ、大丈夫よ。」
私は笑って答える。
「それより……」
私は彼をじろじろと上から下まで眺める。
「……その格好って、流行を取り入れてるの？」
単刀直入に尋ねると、彼はへへっと笑って
『いやぁ、こんな所に着てくるモンが無くて…。箪笥引っ掻き回してようやく見つけたんすよ、これ。』
と、恥ずかしそうに答える。
私は何だか彼のお母さんにでもなった様な気がして、そんな彼に何かしてあげたいと思う。
「……ね、ちょうど洋服屋さんがあるし、新しい服、買いましょうよ。」
と言うと、
『いや、いいっすよ、全然！第一そんな金無いし、俺の買うより優香さんの服買った方が服もきっと喜ぶし！』
彼は手をぶんぶん振って遠慮する。

ちなみに優香とは私の名前だ。彼の名前は亮太という。私達は名前で呼び合っているのだ。
……まぁ、実の所、私は彼の名前を知らないので、仮に夫の名前を付けているのだが。
何故夫の名前にしたのかは自分でも解らないけど、多分どこか夫に対して後ろめたさを感じているのだろう。

「何その理論！」
私は笑って言う。

「お金なら大丈夫、ブランド物とかじゃ無ければ買ってあげられるくらいは持ってるわよ。」
ちょっと偉そうに言って、自分の胸をぽんっと叩く。
『いや、でも……』
と渋る彼を引っ張って、私はめぼしいお店へと突入する。

まるでマネキンや着せ替え人形の様にあれやこれやと試着させ、彼を少しずつ完成させていく。
彼は意外とおちゃらけた性格の様で、私がうろうろとかごを持ちながら服を探していると、変なおっさんが描かれたTシャツをこっそり紛れ込ませたり、ギラギラした帽子を被っては
『俺、アイドルに見えますか？』
等と尋ねたりする。
いきなりで気を悪くしたかと少し心配していたので、そうやっておどけてくれるのが凄く嬉しい。

何軒も服屋をはしごして、ようやく彼が完成する。私の好みで申し訳ないが、少し大人な、かっちりした格好をして貰う。
見込んだ通り、服装を整えた彼は別人の様に見えた。
私達はカフェへ入り、一息つく。

『……疲れました！』
アイスコーヒーを一気にごくごくと飲み干すと、ぷはぁっと息を吐きながら彼は言う。
「ごめんね、引きずり回しちゃって。」
私は目線を落として言う。
『や、良いっすよ、全然。むしろ俺の方こそすんません、何から何

までして貰った上に全部買って貰っちゃって。』
彼は上着を触りながら言う。

アウターには黒の、コーデュロイのジャケット。中には縦に細いストライプが入った襟付きシャツ。
ズボンはあのジーンズでも良かったのだけど、ついでに一本新しく、黒に近い濃いめの色をした少し細身のジーンズを。
靴は少しくすんだ光沢を持つ革の黒い靴。先が尖り過ぎると場末のホストみたいになるので、四角いめのいわゆる普通のデザインの物にした。
一番注意した点は【それぞれ別々に着回せる様に】という所だ。全部合わせるとかなり痛い出費になってしまったが、彼の為なのでしょうがない。
仕上げに薬局のワックスで髪を整える。すると彼は見違えた様に大人っぽく、そして格好良く見えた。

私はそんな彼を前にして、頬杖を付き、微笑みながら満足気に言う。
「良いのよ、ほんとに。……でも、本当に格好良くなったわね。」
『そ、そうっすか？…嬉しいっすね、優香さんにそう言って貰えると。』
彼は少し赤くなる。
「本当よ、見違えた。」
私はテーブルに置かれた彼の手を軽く包む様に握った。
『……有難う。』
彼は私の目を見てそう言うと、手を握り返す。

……

そこでハッと我に帰った。
星占いはとうの昔に終わり、続くニュースもいつの間にかエンターテイメント情報を流している。

「しまったっ……！」
私は大急ぎで朝食の片付けを始める。すっかり想像に耽ってしまった様だ。テレビから考えて、多分一時間近く耽っていたのだろう。
がちゃがちゃと泡まみれの茶碗がぶつかり合う。

最近こんな風に家事を忘れて耽ってしまう事が多い。
いけないと思いつつ、また夕方には性懲りもなく想像するのだ。

「やばいなぁ、私……。」
茶碗を洗いながら呟く。
まだ想像の余韻が残っている様で何だかふわふわする。

「……その内、四六時中考えてたりして。」
苦笑しながら一人ごちるが、冗談じゃなく本当になってしまいそうで、背筋がすっと寒くなる。

「…痛っつっ！？」
水仕事のせいで左中指の先がひび割れてしまったみたいだ。
その痛さでようやく意識がしっかりする。
手を良く拭き、薬を塗ってから防水の絆創膏を張った。

絆創膏の屑をごみ箱に捨てながら、私は大きな溜息をつく。

「このまま想像の虜になってしまったらどうしよう。」

段々と、自分で自分が恐ろしくなってくる。
前までは
「そんな馬鹿な」と笑い飛ばせていたのだが、こんな状態を目の当たりにすると、もう笑ってはいられない。

「……やっぱり減らそう。」
私は、よしっ、と気合いを入れて断言する。
その傍らでは、ニュースが新しく出来た海辺のアウトレットを紹介している。

私は迷いを断ち切る様にテレビの電源を消し、洗濯へと取り掛かった。

さっき確かにごみ箱に捨てたはずの絆創膏の屑が、一つ、ごみ箱の横に落ちたまま置き去りにされていた。

第六話／十月二十八日（後書き）

遅くなってしまいすみません。受験で時間が有りませんでした。これ以降はさらに遅くなってしまうと思いますが、何卒お付き合い戴ければと思います。　気付かない間にＰＶが３００を越えていて驚きました。皆様、本当に有難うございます。今後とも是非宜しくお願い致します。

第七話／十二月一日

……予感は的中した。

『回数を減らそう』と決めてから約一ヶ月強。その数は減るどころか、大幅に増えている。それはもう、家事そっちのけになる程だ。今までは家事の合間に想像していたのだが、それが今では想像しながら行動をしている。
解りやすく言うと、例えば買い物に行く道すがら。

前までは、横を擦り抜けるスクーターを見て彼を想像していたのだが、今では彼と二人で買い物に出掛けているのが前提になっていて、例え横をスクーターが通ったとしてもそれはきっかけにも何もならず、彼に
「あれ、君のと同じ車種でしょ。」
等と話し掛けるのに使われるだけなのだ。

そんな風になってしまっても先週までは何とか家事をこなしていた（隣には常に彼が居た）のだが、今週に入ってからは体を動かす事すら欝陶しくなって、家事なんか殆どせずにソファーに寝そべって

彼との逢瀬に意識を集中する。
勿論、以前の様に彼に会う為に買い物に出掛けたり、スクーターの音がする度に窓から外を見下ろすなんて事は邪魔くさいのでしない。
そんな事より頭の中で一緒にはしゃぎ回る方が、よっぽど楽しい。

……

今日も相変わらず何もせずに、脳内不倫に全ての時間を費やした。

《ピンポーン》
とインターホンが鳴り、続いて玄関が開く音がする。
『ただいま……って、またお前何もやってないのか！』
夫が疲れた顔を、さらに険しくして吐き捨てる。
「だってぇ……なんかしんどいんだもん…。ピザかお寿司か、何か勝手に注文して。」
私は首をもたげて、起き上がる事も無く怠惰に答えた。
『何か注文しろってなぁ、お前今週ずっと店屋物じゃねーか！朝飯も晩飯の残りでろくにお茶も入れずによ、俺だって、いい加減我慢の限界だぞ！』
鞄とスーツを地面へ放り投げ、ネクタイをぐしゃぐしゃと乱暴にもぎ取りながら夫は流し台からソファーへ向かう。

「だってぇ……だから、しんどいんだって言ってるじゃ」
『だったら病院行くとか何とかしろよ！！』
夫が遂に声を荒げた。
『最初はしゃーねぇか、と思ってたけど、どうせ毎日病院にも行かずにグダグダ寝てるだけなんだろ！？そんなんでしんどいとかごちゃごちゃ言ってんじゃねぇよ！…結婚する前に俺言ったよな？“昼間どんな事しようが構わないけど、晩飯だけはちゃんとしてくれ”ってさ！お前、解ったって言ってたじゃねぇか！』
仁王立ちでトドの様に動かない私を上から見下ろし、夫は次々と言葉を吐き掛ける。
初めて夫の怒った姿を目の当たりにして、ようやく私の中に恐怖感と慚愧の念がじわじわと沸き上がってきた。

「……ごめんなさい…。」
私は体を起こし、蚊の鳴く様な声で呟いた。
「…明日からは……ちゃんと、するから……」
固く閉じた自分の拳を眺める。その内、段々自分自身が情けなくなって、気付かない間に涙が目の端から流れていた。

『…解ったら、もういいんだ。』
夫がソファーに座り私の肩を抱きながら、とても優しい声でそう言った。
私はこんな優しい夫に対して、今までずっと裏切った行為をしてい

た。あまつさえ相手に夫の名前すら付けて。
私はこんなにも優しく私を包んでくれる夫の事より、自分の中の霞んで、屈折した虚像をずっと優先させてきたのだ。
……なんて自分勝手で、なんて盲目でなんて愚かなんだろう。

私はその異様なまでに温かい夫の胸に体を預けて、家出した子供の様に泣きじゃくった。

夫は黙って私を抱きしめ続けた。

結局、夕飯は冷蔵庫の中にあった煮物になってしまった。
だがそれはやはり店屋物とは違い、温かい味をしていた様に思う。

それから私達は久しぶりに一緒のベッドで寝た。

夫はとても温かく、くっついてみると、限りなく冷えた私の先端はまるで氷が溶ける様にじゅわじゅわと温まっていく。

もうあの人の事を考えるのはよそう、と思う。
だって私には夫が居るのだから。
都合良く練り上げた泥人形で遊ばなくとも、こんなに血の通った夫が私には居るのだ。

私は布団を口の辺りまで引き上げる。
冷えていた指先が、いつの間にか柔らかく、温かくなっていた。

第八話／十二月二日（前書き）

今回から、事態が展開を見せます。正直気持ち悪いです。了承された方のみご覧下さい。　　あと、今回は少しエロチックな感じが入ってますのでお気をつけ下さい。ちなみに次回はエロがＯＵＴで猟奇がＩＮします。

第八話／十二月二日

……しかしその夜、とうとう私は、夢を見てしまった。
今迄に何度も彼との夢は見た事は有る。だが今回の夢は違うのだ。
全てに於いて、異なっているのだ。

……

気が付くと、私は真っ赤な部屋の中に一人立っていた。格好は十二月だというのに薄い半袖のワンピース一枚である。
「ここは……？」
辺りを見回したが、その部屋には天井から下がる照明以外、何も無い。
窓、ドア、換気扇、そういった類の物が何一つ無いのだ。
それなのに気温は少し暑い程度、湿度は少し高めで保たれている。
まるで夏の様だ。

部屋は壁紙、床、天井、全てが赤…と言うよりむしろ深紅に近い色で統一されている。照明の灯が届かない所は真っ暗で、まるで映画等に出てくる処刑部屋の様だ。

『……たす、け、て……』

聞き覚えの有る声が、いきなり後ろから響いた。
私はゆっくりと振り向いた。

すると、視線の先には最初に出会った時と同じ格好の、彼が居た。
伸び切ったTシャツに履き古したジーンズ、靴は履いていなくて裸足だった。他の部分と同じく、とても白い。

ただいつもと違う所は、彼がぽろぽろと涙を零していた事、
そして
まるで捕虜か罪人の様に、手足を金属の台へ大の字型にはりつけられていた事だった。

私は彼のもとへと歩み寄る。何故こうなっているのかは皆目見当がつかない。

彼は涙を零しながら、掠れ、震えた声で私に言う。
『どうして……ど、どうしてこんな事、す、するんですか？奥さん……。ぼ、僕、何も奥さんに恨まれる様な事、し、した覚え……』
私が彼のすぐ前まで近付くと、彼は『ひっ……！』と、か細い悲鳴を上げてそのまま喋るのを止めた。
彼は身体を強張らせ、私の右手へと視線を注ぎガタガタと震えている。
それに気付き右手へ視線を遣ると、
そこには包丁が握られていた。

彼は力を振り絞る様に私へ泣いて懇願した。

『お願い……お願いしますっ…！…た、頼むから、い、命だけは…。…ぼ、僕が何かしたのなら、あ、謝りますから…！だから、お願い……こ、殺さないで…た、助けて下さい……！』
彼の涙が、その年齢には珍しい程の白くきめ細かい頬から、不精髭の生える顎を伝って下へ、ぽとぽとと落ちる。
彼の眉間に大きく皺が寄り、そして涙を湛えた少し大きめの目は、私の顔を凝視して離れない。
歯を食いしばって恐怖と屈辱に堪えているその表情は、私が今迄想像してきた中には無い新しいものだった。

ふ、と、今迄感じた事の無い感情が私を襲う。

「……美しい……」

私はそっと呟いた。
彼の目が更に大きくなる。
今迄、彼の笑顔は幾度もそう思ってきた。だが、まさかこんな表情にまで心動かされるとは、自分でも思っていなかった。

彼の眉間に寄る深い皺、少し手入れされた眉毛。奥二重の開かれた目、そこに生える睫毛。
ちょっと丸っこい鼻、不精髭の生える鼻の下。恐怖にわななく両唇、髭の生えた、無駄な肉の無い顎。
色白の肌、ボサボサの髪、球形に浮き出る汗、瞳に溜まる涙、痩せた身体、骨格、筋肉。

……全てが美しく、気が狂いそうになる程に愛おしい。

私は、彼がはりつけられている台を、ゆっくり垂直から水平状態へと倒した。
『…なっ……！何をするんですか…！？』と彼は声を上げて驚く。
部屋の赤い壁と天井の柔らかな照明を銀色の台が鈍く反射している。

私は無言のまま、寝そべった形の彼に跨がる様に銀色の台上へと登る。彼に跨がると、スカートから出た膝下に異常な程冷えた台の感触が伝わった。
包丁を持ったまま、両手を彼の両頬の脇へ手を付き、上半身を前へ傾かせてゆっくり下から上へとなぞる様に見つめながら、彼の顔の真上へ顔を動かす。
ちょうど彼へ覆いかぶさる様な格好だ。
ふと見ると、彼の涙は、今度は頬を伝わずに目尻からそのまま耳へと流れ落ちている。

もう、何も解らなくなった。
ただ目の前に居る彼が美しくて愛おしくて。
彼の涙も表情も、何もかもが欲しい。堪え難く愛おしい。

私はもっと顔を近付けた。
私の髪が彼の頬へ触れ、そして同時に彼の匂いが鼻腔を突き上げる。

私は導かれる様に彼へと口付けた。

彼は身を固くする。が、抵抗する素振りは無い。当たり前だ、私を怒らせる訳にいかないのだろう。

私は気を良くして何度も確かめる様に、貪る様に、深く口付けていく。
彼の渇いた唇の感触や彼の匂い、そして唇とは対照的な口内の湿り気や熱い吐息が、私の唇と鼻腔を介して脳へと伝わる。
……愛おしい。

一旦離れて彼に目を遣ると、彼は眉間に一層深い皺を寄せて、固く閉じた目から涙を幾重に零し、下唇を噛んで屈辱に堪えている。……その姿が震える程美しい。ぐちゃぐちゃにしたい程愛おしい。

私は舌を延ばして、自分の唇をゆっくり舐めた。不思議な事に、そこからは彼の味がする。

彼の渇いた唇、そして不精髭が自分の皮膚を擦る感触、吐息、口内の湿り気、体温、匂い。
その途端、先程私を貫いた刺激の一つ一つが混ざり合い、一つの大きな濁流となって一気にフラッシュバックした。

私は身体を震わせ、もう一度彼に深く口付けた。

第八話／十二月二日（後書き）

１０月のアクセス数が２倍になってたんですね。ぬか喜びでした（苦笑　次の投稿は本当に遅いです、多分。

第九話／十二月二日（続き（前書き）

グロ＆ａｍｐ；サイコ描写が酷いです。自分で書いてても気持ち悪かったので、ご覧になる方はくれぐれもご注意下さい。でもまぁ、内臓ボッローンとかカニバリズムとか、そんな程では無いので、そんなに身構える程でもないかもしれません。　今回片手間で書きましたので、以前のよりも誤字脱字、文章や設定の破綻が酷いかもしれませんが、何卒ご容赦願います。

第九話／十二月二日（続き

ひとしきり堪能すると、私は体を起こして、口の端だけを引き上げた嫌な笑い方をしながら彼を見下ろした。
鏡を見ていないから解らないがその時の私の顔は、きっと白雪姫に林檎を売りにきた魔女か、もしくは某漫画の喪黒福造の様な薄気味悪いものだったに違いない。

『……ど、どうして奥さんはこんな』
「優香でしょ？」
目尻から涙を流しながら哀願する彼の言葉を、冷たく遮る。
『…ゆ…うか…？』
「そう。そうやって呼んでって、前に頼んだでしょう？今までずっと呼んでたのに、こんな時だからって気を使わなくて良いのよ。」
うっすら微笑みながら、優しく彼を咎める。
『や、でも僕奥さんを』
「呼びなさい。」
私は真顔で命令した。こんなに仲良くなったのに、今更そんな他人行儀にされるのは正直気分が良くない。
『ひっ…！』
彼が身を竦める。
『…わ、解りました！呼びますから！それで……ゆ…うかさんは、いったい……いったい、僕をどうしたいんですか！？僕、僕…まだ死にたくないっ！！』
彼の中で何かの糸が切れたのだろう。彼は神経質にそう叫ぶと、いきなり大きな声を上げて泣き始めた。
私はそれを、まるで映画やアニメでも見る様に、無感動にただぼうっと眺めた。

……今日は何もかもが違う。
彼は私の事を名前で呼ばないし、会った時のままの格好だし、見た事無い表情ばかりするし、こっそり夢見ていた彼とのキスも何だか予想と少し違うし、何より、……彼を愛しいと思うのだ。
それは私が今まで感じてきた愛しさではなく、何と言うか…どす黒い、粘ついたモノに包まれた、濁った愛しさだった。
そして今、泣き叫ぶ彼を眼下に置いて、新たな感情が私の背筋を駆け登ったのである。

「……貴方が生きるのも死ぬのも、……私の気分次第なの。」
私は粘ついた支配欲に塗れた笑顔で、彼の耳にそう囁いた。

『ひぃっ……く!!』
彼の嗚咽が止まる。
良い眺めだと、私は思った。

今私は、『彼』を構成するモノの殆どを手にしている。それは物質的なモノでなく、あくまでも目に見えない代物なのだが。
喜、哀、楽、と言った彼の感情や表情、彼の自由、そして彼の運命。

こんなにも愛しい彼の内のいったい何割を、私は今手にしているのだろう？

そして、いったい何割を手にすれば…私は彼と一体に成れるのだろう？

…愛しい。愛しくて堪らない。
彼の総てを手にしたい。彼の総てを手に入れて、そして私も彼の総てに成ってしまいたい。彼だけの私で、私だけの彼で在りたい。
…あぁ、いっその事彼と一体に成ってしまえたら、どんなに幸せだろう！彼の内側に私が入って、彼を通して世界を感じるのだ！何て素晴らしく、何て扇情的で、そして何て羨ましい事なんだろう！
私はそれを想像して、思わず体を震わせた。
眼下の彼は涙を溜めた目で私を見上げる。

それを見た私は背骨の辺りから湧いてくる生温い衝動に身を任せ、右手を少し上げ、そのままふらっと彼の右頬に振り下ろした。

《シュッ》
と音がして、彼の頬すれすれを刃先が掠めてそのまま銀色の台に少

し突き刺さる。
『うわぁっ！』
突き刺さるのに半拍遅れて、彼が一際大きな悲鳴を上げながら顔を左へ背けた。透き通った大粒の涙が彼の肌の上を滑り落ち、小さな水溜まりを作る。
私は左の親指で左目尻から一直線に続くその涙の痕をなぞり、そして水溜まりへ指を浸した。
彼は失神しかかっているのか、目をつむったまま、声を発する事無くただガタガタと震えている。
私は浸した指先を、そっと舐めた。
目を閉じて味わう。初めは冷たさと塩辛さが舌を突くが、その後ろから彼の味がついてくる。

これでまた一つ、彼に成れた。

私はとびきりの笑顔で彼を見下ろした。
すると彼の右頬には一筋の赤い線が走っていて、そこには薄く血が滲んでいる。私は舐めた親指をその線に伸ばし、ゆっくりなぞった。
指先がほのかに紅く染まる。何とも魅惑的な色だ。
私はまたその指を舐めた。
目を閉じて味わうと、鉄と彼の匂いが頭にじんわり広がる。

これでまた一歩、私の理想に近付いた。

私は舐めた指先をじっと見る。するとそこにはもう、あの紅い彼は居ない。
私は何だか急に淋しくなって、また彼の傷をなぞった。

『……いっつ！』
彼が小さく呻く。
同時に彼の眉間に皺が寄る。彼の口が歪む。彼の目が更にきつくつむられる。そして彼の目から涙が落ちる。
その表情が何ともいじらしく、愛しい。

なぞった指先を見る。
紅い液体が指先を濡らしている。
同時に私の眉が下がる。口元が緩む。更に目が細くなる。そして笑みが零れる。
この冷えた紅い液体ですら堪らなく愛おしい。

……もっと。
もっと彼が欲しい。
もっと彼を手に入れて、彼と一体に成りたい。
もっと彼の体温を感じてみたい。
もっと彼を味わってみたい。
もっと彼の鼓動を肌で感じたい。
もっと彼の涙を見たい。もっと彼の可愛い表情が見たい。子犬の様に震える姿が見たい。赤ん坊の様に泣き叫ぶ姿が見たい。
もっともっともっと……。

私は目茶苦茶に右手を振り上げ、そして彼目掛けて振り下ろした。
ガツガツと何度も台に刃先が突き刺さる音や彼の着古したTシャツを裂く音が聞こえ、そしてその度手に感触が伝わる。
熱く紅い彼が何度も私の皮膚に飛び散り、そして私の上で流れながら冷えていった。同時に私の皮膚も冷えていく。

……あぁ今、流れていく彼と私の表面温度は一体になっている！

「あはは、あはははは！！」
離れていた二人が一体に成っていくのを文字通り肌で感じられて、私はとても満ち足りていた。自然と笑いが込み上げてきた。
私の心臓が今までで一番踊り狂っているのが伝わる。ドクドクという低い音が胸の骨や筋肉を突き抜けて赤い部屋にうるさい程、響き

渡っている。
だんだんこめかみが熱くなってきて、軽く汗ばんできた。目も冴えてきた気がする。きっと彼の体温を感じ過ぎたのと、激しい鼓動のせいだろう。
思い切り刺してしまわないように気をつけながら、私は執拗に彼の腕や胸を狙った。

彼は必死に抵抗していた。
『…痛！止め、止めて！お願、い、お願い、止め！ゆ…かさん！おねが、や、…止めろ！！』
するといきなり、彼が私を怒鳴り付けた。
『い……いい加減にしろよ、この野郎！人が下手に出てりゃ調子乗りやがって！いったい俺があんたに何したってんだよ！？そんな猫が鼠いたぶるみたいに、ちまちまやるんだったらなぁ、……ひ、一思いに殺しちまえば良いだろぉ！？』
彼は喉が張り裂けんばかりに叫んだ。
私は彼を見下ろし、右手を振り上げたまま思わず固まってしまった。
さっきまでうるさい程に響いていた心臓の音が急に聞こえなくなり、汗ばむ程に上がっていた私の体温が頭から順にさぁっと冷えていく。

彼は……いったい何と言ったのだろうか？
微かに耳に残った声をどうにか引きずり出してみると、どうやら彼は
『いい加減にしろ、殺すなら殺せ』
と言ったらしい。
彼を見る。
すると彼は見た事がない、さらには想像も出来ないような表情をしていた。目から痛い程の力が溢れている。
これは……まさか……。

『何だよ、黙ってないで何とか言えよ！』
彼がまた喚きだす。
『何の権利があって、お前はこんな事してんだよ！？俺はお前なんか、何とも思ってねぇ』

「今」

私は呟いた。
『……え？』
彼の動きが止まる。
私は体を倒し、もう少しで彼の顔についてしまうくらい顔を近付け、間近で彼の目を見て言う。
「今、怒ったでしょう。…それに『殺すなら殺せ』って、少し自暴自棄になって絶望した。……って事は、私、」
私は姿勢を戻して彼を見下ろし、笑顔で言った。

「…足りないもの全部、手に入れちゃったんだ。」

私は左手を彼の顔の脇に起き、右手を高く振り上げた。彼が喚くのが遠くで聞こえる。
一度治まった鼓動が更に激しく跳ね回り、そして体が熱くなり自分の鼓動の音以外何も聞こえなくなった。
彼の匂いが私を包み込む。

今までに見た喜と楽の表情、そしてさっき見れた怒と哀の表情。
彼の喋る声、笑う声、泣く声、怒る声。
彼の体を構成する、体温、体液、匂い。
そして彼の運命と、自由。
全て、手に入れた。

……あぁ、私は今、完全に彼に溶け込んで一つになったんだ！

嬉しさのあまり、無性に彼を目茶苦茶にしたくて。もう全て溶けて一つになるくらい目茶苦茶にしたくて。
私は勢いよく彼の首元へ包丁を振り下ろした。

水っぽい音と共に、温かい彼が私の顔を濡らす。
もっと彼を感じたくなって、私は目茶苦茶に彼を突き刺し続けた。

次第に彼の声が途切れ、噴き出す液体の量も減り始めた。
それでも尚、私は甲高く笑いながら彼を目茶苦茶にし続ける……。

……

「…ぅあぁぁぁぁぁぁあっ！！！！」
私は物凄い叫び声を上げながら跳び起きた。
肩で息をする。粘ついた汗が背中やこめかみ、胸を滝の様に流れている。
「ゆ…、夢……か…。」
両手で髪の毛をぐしゃぐしゃに掻き回し、引っ張りながら布団にうずくまる。…何だったんだ、あれは！

『おい…、大丈夫か？』
ハッとして横を見ると、夫が枕元の電気を点けてこちらを心配そうに見ていた。
『何かあったのか？病院…行くか？』
晩に叱りすぎたと思ったのか、夫はとても優しい声で尋ねてくる。
「ううん、大丈夫…。……ちょっと、怖い夢見ただけだから。」
私は軽く笑いながら答えた。
『そっか…無理するなよ。』
そう言って夫は私を抱き寄せた。夫の温かさと、透ける程汗に濡れたパジャマが冷たく張り付く感触の落差にぞっとする。

どうしてこんな夢を見てしまったのだろう？心を入れ替えて、夫の温かさに包まれて眠っていた、こんな時に？
目を閉じると、あの恐ろしい夢が鮮明に蘇る。
泣き叫ぶ彼の声、肉を切り刻む水っぽい音、うるさい程響く拍動音。彼の血液が飛び散って顔にぶつかる感触、まるで沸騰したみたいに波打つこめかみ。そして血液の生温い温度と徐々に冷えていく皮膚。
私は自分に怯え、恐ろしさのあまり啜り泣きながら、がむしゃらに夫にしがみつき胸に顔を埋める。

そして頬を流れ落ちる自分の熱い涙と冷えていく皮膚の温度に、もう一度大きく震えた。

第九話／十二月二日（続き（後書き）

ここまでお読み戴きまして、本当にありがとうございます。　後二回で完結予定です。最後までお付き合い戴ければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7936c/

ポインセチアと、影の伸びる部屋

2010年10月9日07時54分発行